
STAR DRIVER -失色のシルシ-

ぶんこ酢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

STAR DRIVER - 失色のシルシ -

【Nコード】

N3081BA

【作者名】

ぶんこ酢

【あらすじ】

「未練はある。だから、未練はない」

そう言い、親しき者の記憶から自らの存在を消し、再度眠りについた青年？ライ？

彼は新たな地で目を覚ます。その地の名は？南十字島？

ライはこの地で、何を見て、何を知り、そして、どんな色をその瞳に映すのだろうか。

STAR DRIVERの世界に、ロスカラのライさんをぶちこみ

たい！！という、理由だけで書き始めた、血迷い小説。
小説初心者なので、どうなるか分かりません。それでも良ければ、
生暖かい目で読んでみて下さい。

プロローグ（前書き）

初投稿！！

ん？

そういえば、これって需要あるのか？

プロローグ

まだ、日も沈んでいないというのに、その場所は一切の光も無かった。ただあるのは、滴る水の音と、2つの足音のみ。

反響するその音が、この場所が狭く、閉鎖的な空間であることを示している。

「…本当に？ 見えた？ のか？」

左目に眼帯をした壮年の男？ カタシロ・リョウスケ？ は、怪訝な表情で、前を歩く、大人びた雰囲気的青年に問い掛ける。

「疑っているのかい？ 俺の第1フェーズの力を、君はよく知っているだろ？」

一方、問い掛けられた青年は、玩具を与えられた子供のような顔で、

「間違いないよ。彼はこの奥で眠っている」

大袈裟とも言える身振りで答えた。

「…そうか」

カタシロは、そう短く言葉を発し、前を歩く青年の背中を、沈鬱な表情で見つめていた。

先程言葉を交わしてから数分、2人の間に言葉はない。ただ黙々と歩き続ける。そうしてたどり着いたのは、先程の狭い道とは違う、拓けた空間。

入口付近でさえ、光が少なかったのだが、この空間の一部分だけが、紅く淡い光を放っている。光を放っているのは、巨大な石の扉に描かれた、鳥が羽ばたいているかのような紋様。

「…これは」

幻想的なその光景に、カタシロは息を呑む。

「驚くのは、まだ早いよ。この扉の向こうに、この光景以上に貴重な存在が居るんだ」

幻想的な光景には目もくれず、青年は石の扉へと歩みを進める。カタシロも青年の後に続き、扉へと向かう。

カタシロが、自身の隣に並んだのを確認して、青年が扉に手を当てると、鈍く重みのある音を立てながら、扉がゆっくりと開いていく。

「それじゃあ、行こうか。眠っている王子様を起こしにね」

そう言って青年は、扉の内側へと消えていった。

プロローグ（後書き）

短い…。そして、文才欲しい…

これは続くのだろうか？

そして、ヒロインどうしよう…

とりあえず、続き考えなくては。

よろしければ、また読んでやってください。

別れの記憶（前書き）

これは……駄目だな!!

別れの記憶

そこに在ったのは静寂だった。

辺りに人の気配はなく、夕陽で赤く染まった世界と、緩やかに吹く風の音が、どこか物悲しさを感じさせる。

その世界に居るのは、一組の男女。

『挨拶は済ませてきたか？』

口を開いたのは、緑の髪と金色の瞳の少女。

普段の傍若無人な彼女は鳴りを潜め、慈悲に満ちたその顔は聖母のように見えた。

『ああ』

一方、青年の口から発せられたのは、短くも強い音。
銀の髪に碧眼という冷たさを感じる容姿の彼は、真っ直ぐと少女を見据えている。

『そうか。未練はないのだな？』

我ながら意地悪な質問をした。と、少女は内心で嘆息する。
彼が初めて得た穏やかな日常だ。未練がないわけがない。しかし、返ってきた言葉は

『未練はある。だから、未練はない』

という、彼女の頭を混乱させるものだった。

『意味がわからないぞ』

『簡単な話だ』

眉根を寄せた少女を見て、青年は軽く息を吐き、先程の言葉の意味を話し出す。

『未練はありすぎる。ここや騎士団で過ごす日々を、僕は失いたくはない。』

だから、この日々を失わせる僕は、ここに居るべきじゃない。それが分かったから、僕はここを自分の意思で出ていける。

ここに残ることに、未練はない』

強く、優しく、それでいて悲しい言葉。

そこに一切の迷いはない。

『……………それを未練と言う気もするがな。本当に行ってしまうのか？』

少女の顔は弱々しく、印象的な金色の瞳は揺れ、漏れた言葉は思いの外小さかった。

青年は小さく頷く。

少女は彼がこう答えるのを分かっていたのだろう。しかたないな、と肩をすくめた。

『では、神根島に行け。お前の望みは叶うだろう』

少女はそう言い残して、立ち去っていく。

青年は彼女の背中を眺め、そして視線を学園へと向けた。

《さよなら、みんな》

穏やかな日常を思い返す。

かけがえのない友の笑顔が、瞼の裏に浮かんだ。

その笑顔を、ゆっくりと、胸の奥に刻みつけ、歩き出す。

――――

薄暗い室内。

そこは、巨大な鳥籠がある異様な空間。その鳥籠の中には、首輪を付けられた少女がいる。

「少年は恋をした。そう、浜辺で出会った少女に少年は燃えるような恋をした」

彼女は語る。

それは、この場に居る1人の青年のため。

「いいねえ。恋物語か、好きだよ…場所はどこ？」

青年は問う。

その問いに少女は少し考える様子を見せた。

「そこは…魚の惑星」

「面白いよ、サカナちゃん」

少女は？サカナちゃん？、と呼ばれているらしい。彼女は、青年に一度視線を送ると、話しを続ける。

「少年は腕の良い漁師だった。名前は…サムでどう？」

「サム…いい名だ」

「少年サムは出会った少女と二人、ボートに乗って眩い銀河の世界に旅立つことを夢見た」

ここで彼女は言葉を切る。

「けれど、少年が恋したのは少女だったのか…それとも銀河の世界だったのか」

「人生という冒険は続く」

――――

少女…サカナちゃんの作った物語を聞き終えた青年？ミヤビ・レイジ？は、とある場所に来ていた。

白を基調とした清潔感のあるその場所は、様々な専門機器が並び、薬品の独特な匂いが立ち込めている。

その部屋の中央にあるベッドには、銀の髪 of 青年が横たわっていた。

「……君は、いつ目覚めるのかな？」

レイジはベッドの脇に腰かけ、青年の銀の髪に触れた。髪は指に絡まることなく、サラサラと流れる。

しばらく、その髪を弄んでいると、部屋の扉を開き、カタシロ・リヨウスケが入ってきた。

それを確認したレイジは、髪を弄るのを止め、立ち上がる。

「身体に異常はない。」

早ければ今日中にでも目を覚ますだろう。とのことだ」

カタシロは、医者に聞いた青年の容態を事務的にレイジに伝える。

「それは良かった。」

治療に何日も掛かるなんて面倒だ。
彼には早く役に立って貰わないと」

その言葉にカタシロは眉根を寄せる。

「……やはり、利用するのか？」

分かっていた。

レイジが？見た？と言った時から。

確かに、この青年は何か特別なのだろう。今まで立ち入ることの
出来なかった場所に忽然と現れたのだから。

「当然さ。」

彼はきつと特別な力を持っている」

「……きつと？随分と曖昧な言葉だな」

そう、曖昧なのだ。全て。

青年がどこから来たのかも、どうやって現れたのかも、どのよう
な力を持っているのかも。

そして、レイジが何を？見た？のかも。

「曖昧で十分さ……俺は？見た？んだ」

そう言っってレイジはカタシロの脇を抜け、病室を出ていった。

――――

『――みんなが、僕を忘れますように』

胸が締め付けられる。

寂しさ、悲しさ、後悔。

意識が光と共に溶け出した。

『おやすみ』

意識が途切れる寸前、遠くで懐かしい声が聞こえた。

別れの記憶（後書き）

はい！！駄文！！短い！！

『の部分』は記憶です

彼は目覚めませんでした

次回、目覚めます。たぶん

銀の目覚め（前書き）

もう、全体的にやっつけです。

銀の目覚め

日の暮れた海岸沿いを、一台のバイクが走っていた。

そのスピードは基準を超えているのだろう、カーブの際にタイヤがキイイ！と悲鳴を上げる。

ドライバーはヘルメットを被っておらず、それどころか奇声を発している。

バイクのドライバー？ゴウダ・テツヤ？は、気分が高揚していた。その理由は幼馴染みの？シナダ・ベニオ？にキスされたことにある。

そう、？キスされた？のだ。

しかし、テツヤにとつて、そんなことは些末なこと。

今の彼にあるのは、確かな戦意。

ベニオの為に戦う。ただそれだけ。

テツヤはバイクを走らせる。戦場に立つために。

――――

鳥籠の中に少女はいた。

白いワンピースを着た彼女は、うつ伏せになり、足をパタパタと上下に動かしている。

今、この場には彼女一人しかない。

あの人が居なければ、おとぎ話を話す気も、歌をうたう気もしない。いや、出来ない。

つまり、彼女は暇だった。

鳥籠の中に首輪で繋がれていては、出来ることも限られてくる。

彼がくれた童話を読もうか？それとも、完成すれば美しい海と色とりどりの魚が浮かぶという、ジグソーパズルをしようか？

しかし、どちらも気乗りしない。

グラスに注がれた水を指で弄ぶ。水面に波紋が広がる。

すると、水面に誰かの姿が映った。

自分ではない。顔は見えなかったが、その銀の髪は目に焼き付いた。

その姿は悲しげで、とても儚く見えた。

「……いいよね？」

この場にはいない彼に問う。

先程までは、うたうつもりはなかった。彼がいないから。

だけど、今はちがう。

彼以外には聴かせたことのない歌を、水面に映った誰かの為にうたいたくなった。

「……………」

彼女は胸に手を当て目を瞑る。

静かに息を吸い、清らかな音を発する。

遠い誰かに想いを馳せたその音は室内に反響するだけだ。

しかし、不思議と？届く？そんな気がした。

—————

南十字学園学園寮の裏山には廃坑跡がある。

入口にはフェンスと有刺鉄線が嚴重に施しており、見ただけで立入り禁止だとわかる。

この警備を突破してまで、廃坑跡に入ろうとする者など滅多にいないだろう。

つい先日、ペンチを用いて侵入しようとした少年がいたようだが……。

その廃坑跡内部に、複数の人影が見られた。

？ 綺羅星十字団？

彼等は一様に道化師のような出で立ちで、顔の上半分を覆う仮面をつけている。

その道化師のような服には共通のマークが意匠されており、それぞれランプの？ スピード？？ ハート？？ ダイヤ？？ クラブ？？ ジョーカー？ これによって部隊を分けている。

「開け！ 電気枢！！」

その中の一人、第5隊 フィラメント所属？ スピードキッド？ とゴウダ・テツヤが叫ぶ。

目の前には大仰な機械？ 電気枢？。 電気枢の周りには、サイバディの素体である巨大なマネキンの様なものが何体も立っている。

テツヤは、自分を招き入れる為に開いた電気枢の中に乗り込んだ。 サイバディの遠隔操縦装置である電気枢の内部はコックピットになっている。

コックピットに座ったテツヤは、自らのシルシの描かれた仮面を外し、目の前にある装置に仮面をセットする。

「アプリボワゼー！！」

体をシートに固定され、機械によってシルシが刻まれる。痛みが体を駆け巡る。

それと同時に、マネキンの様だった素体が固有の姿と能力を得る。

世界の時間が止まった。

――――

そこは一面黒の世界。光もない闇の世界。

いや、この黒は闇ですらないだろう。

この世界にあるのはただ一つ、輪郭のボヤけた銀の人影。

銀の人影はさまよい歩く。

それはまるで、自らの在り方を探すかのようなだった。

右に揺れ、左に揺れ、時には立ち止まり、辺りを見回す。そしてまた歩き出す。

何度繰り返しただろうか。

この世界を全て歩いたかもしれない、半分も歩いていないかもしれない。

しかし、見つかったものはなかった。

不意に銀の人影がぶれる。

曖昧だったその姿が足元から粒子となって消えていく。

立つことが出来なくなり、前に倒れ込む。

このまま消えてしまうのだろうか。諦めが体を支配する。

下半身が全て消えようとした時、どこからか歌が聞こえた。
優しく、清らかな歌声だ。

銀の人影は辺りを見回す。

しかし、誰もいない。その間にも体は消えていく。

ふと銀の人影は思う。

そういえば、空を見上げたことは一度もなかった。

空を見上げると、一つの星が強い光を放っている。

その星は明滅し、自分を読んでいるような気がしてならなかった。

銀の人影は星へと手を伸ばす。

決して届くことはないだろう。

それでも手を伸ばさずにはいられない。

あの星から歌声が聞こえるのだ。

この世界でやっと見つけた自分以外の存在なのだ。

体が消えていく。

残っているのは、頭と右上半身だけ。

千切れんばかりに手を伸ばす。

銀の人影は無意識に呟いた。

「アプリボワゼ」

――――

「ゼロ時間？と呼ばれる異空間の中で、巨大なオートバイが疾駆する。」

スピードキッドが操るサイバディ？テトリオート？だ。
背面のブースターを併用し、高速移動で敵を翻弄する。

敵は、銀河美少年が操る貴公子のような細身の外見を持つサイバディ？タウバーン？。

テトリオートのスピードに反応しきれずに、その体に傷をつけていく。

その様子を特殊空間？球体機敷？（きゅうたいさいじき）の中で、
綺羅星十字団の面々が見ていた。

「随分と浮かれているわね」

スピードキッドのテンションを見てそう言ったのは、第4隊
おとな銀行代表？頭取？

「あんた、もしかして第1フェーズを使っただけじゃないの？」

疑惑の目で隣の球体機敷にいる人物を見ながら言ったのは、第3
隊 ブーゲンビリア代表？イヴローニユ？

「何のことかしら？私はキスしてあげただけよ」

イヴローニユの言葉にしらを切るのは、第5隊 フィラメント代表？ スカーレットキス？

「あら、純情なのね」

そう言って頭取は、スピードキッドの操るテトリオートを見る。

サイバディの戦いは終わりへと近づいていた。

高速移動でタウバーンを翻弄していたテトリオートは、とどめを刺そうと距離をとり、正面から突撃する。

「よし！ やっちゃえ！」

スカーレットキスが声を上げる。

炸裂！ タウ・銀河ビーム！！

しかし、とどめを刺そうとした直前に、タウバーンの胸部から放たれた光の放流にのまれ、テトリオートは破壊された。

テトリオートから放出された光が空に上がる。

これで、ゼロ時間が終わる。

そのはずだった。

――――

「おかしい。何故、ゼロ時間が終わらない」

最初に気づいたのは頭取だった。

サイバディが破壊されたのならば、ゼロ時間は終わるはず。なのに一向に終わる気配はない。

周りの者も異変に気づいたのだろう、忙しく辺りを見回し、焦りの声が上がりはじめた。

「ゼロ時間に閉じ込められた？」

誰かがそう呟いた。

だとすれば問題だ。

ゼロ時間は異空間。普通の日常には戻れない。

それでも冷静でいなければ。

まずは原因の解明、それからだ。

「科学ギルドの見解はどうなのかしら？」

この場にいる者の中では、もっともゼロ時間とサイバディに詳しいであろう人物に頭取は話を聞く。

「ゼロ時間に異常は見られない。しかし、ゼロ時間が終わる気配はない。考えられる可能性は多々あるが、もっとも可能性が高いのは……」

第6隊 科学ギルド代表？プロフェッサー・グリーン？は一度言葉を切り、周りを見回したあと言葉を続ける。

「23体目のサイバディが存在し、そしてシルシを持つ何者かがそ

のサイバディにアプリボワゼしている。というのが一番説明しやすい」

綺羅星十字団の面々に衝撃が走った。

23体目のサイバディの存在だけでも驚きだというのに、シルシを持つ者まで存在すると言うのだから。

さらに周りが騒がしくなる中、各隊の代表だけは静かに思案し、プロフェッサー・グリーンが述べた理由に納得していた。

ゼロ時間が発動するのは、サイバディが起動した時だ。つまり、テトリオートが破壊された今、ゼロ時間が終わらないということは、新たなサイバディが起動したということ。

それが事実なら、23体目のサイバディとシルシを持つ者の存在も簡単に説明できる。

現在確認されているサイバディは、タウバーンを含めて22体。

その内の16体は綺羅星十字団が掌握しており、残りは、四方の巫女が操る？巫女タイプ？のサイバディ4体、銀河美少年が操るタウバーン、そして所在が不明で壊れていると思われる？キング・ザメク？だ。

綺羅星十字団の人間がアプリボワゼするには電気枢を使う必要がある。

しかし、電気枢は一機しかなく、その電気枢も先程までスピードキッドが使用していた。

四方の巫女がアプリボワゼすることはまずなく、戦闘を終えた銀河美少年がゼロ時間を維持する理由もない。

キング・ザメクにいったっては所在もわからず、アプリボワゼには死という危険が伴う。

すなわち、考えられるのは、23体目のサイバディとシルシを持つスタードライバーというわけだ。

「確かに、それならこの状況も説明がつくわ。だけど、肝心の23

体目のサイバディはどこにいるのかしら？」

一足先に思案から戻った頭取はそう言うと、辺りを見回す。
そして、見つけた。

上空で強く輝く一つの星を。

星の輝きは徐々に大きくなる。いや、近づいてくる。

豆粒ほどの大きさだった星は瞬く間に大きくなり、地上に影を落とすほどになった。

そこまで来てようやく気付く。
星ではない。

「伏せなさい！！」

咄嗟に叫ぶ。

瞬間、轟音と衝撃が球体機敷を震わせる。

頭取の声に反応できた者は膝をつき、できなかった者は衝撃で倒れる。

その原因である物体は、タウバーンの近くに巨大なクレーターを作った。

「まさか、あれは……」

物体を覆い隠した煙が晴れていく。

そこに在ったのは…

「…23体目のサイバディ」

美しく輝く剣を携えた、白と黒の西洋騎士のような外見を持つサイバディだった。

――――

黒の世界に一人、星の歌声を聞いた。
美しい歌声だった。

届くはずのないその星に手を伸ばした。
呼ばれた気がしたから。

あれは全て夢だったのだろうか。
混濁した意識が浮上する。
薄く開いた目に光が射し込んだ。

「…ここは」

光に目が慣れず視界がボヤける。

曖昧な視覚を補うために嗅覚と聴覚を研ぎ澄ませた。
それらの情報を統合して導かれたのは、ここが神根島の遺跡ではないということ。

あの遺跡特有の匂いも、じめじめとした湿気も感じない。
そして何より、多数の人のざわめきが聞こえる。

あの遺跡に人が集まるとは思えない。
ボヤけていた視界がクリアになりはじめた。

「なっ!？」

目に映ったのは貴公子のような細身の外見の異形。
その異形は身構え、こちらを見ていた。

だが、敵意は感じられず、寧ろ困惑しているように感じられる。

頭が混乱する。

このような兵器は見たことがない。

ナイトメアよりも遙かに大きい異形を前に、思わず右足を後ろに引いた。

途端、一気に頭が冷めていった。

古代文明の記憶が流れ込んでくる。

サイバディについても、ゼロ時間についても分かる。

それだけではなく、この世界が自分がいた世界とは別だということとも分かった。

アプリボワゼすれば、サイバディの持つ古代文明の記憶を共有する。

つまり自分は、サイバディとアプリボワゼし、サイバディに乗り込んでいるのだろう。

「……なぜ」

何故、自分はこの世界に来て、目覚め、そしてサイバディにアプリボワゼする資格を持っているのだろうか。

その理由は、まだ、分からない。

銀の目覚め（後書き）

今話について言えること

時間軸はアニメ第2話

結局、ゴウダ先輩は噛ませ犬

サカナちゃんはヒロインではない

キャラの台詞はほぼ想像

作者は、細かい描写が苦手

主人公の名前がまだ一度も出ていない

駄文

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3081ba/>

STAR DRIVER -失色のシルシ-

2012年1月12日17時48分発行